

室生犀星全集

第十一卷

新潮社

室生犀星全集 第十一卷

昭和四十年一月十日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

著 者 室 生 犀 星

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 二光印刷株式會社

發行所 株式會社 新 潮 社

〒一六二 東京都新宿區矢來町七一
電話 東京03(二六〇)五一(業務)
東京03(二六〇)五四(編集)
振替 東京 四一八〇八

(全十四冊セット) 定價 四九、〇〇〇圓

處丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

室生犀星全集

第十一卷

編纂

題字

西	奧	福	伊	窪	中	三
川	野	永	藤	川	野	好
	健	武	信	鶴	重	達
寧	男	彥	吉	次郎	治	治

第十一卷
目次

小説

かげろふの日記遺文	九
蜜のあはれ	一九
少女榮え	一九
逮捕の前	二三
つゆくさ	三四
遠めがねの春	三七
名もなき女	四九
山も人も黙す	四四
黄ろい船	五六
二十歳の燦爛	五四
考へる鬼	五五
齒の生涯	三三

借金の神祕	三三
衢のながれ	三三
なやめる森	三五
朝顔	三六
火の魚	三七

随筆・評論

誰が屋根の下	二六	中村武羅夫を悼む	二二
乙女の前	二〇	秋聲考	二四
悼迢空	二五	天外先生	二六
堀辰雄を悼む	二九	〈李朝夫人〉	
		サイン・パーティー	二七

李朝夫人……………四一九

二日會のひとつ……………四二三

佐藤春夫のあれこれ……………四二四

正宗白鳥論……………四三九

〈刈 藻〉

老乙女の詩集……………四三八

ひとのあけくれ……………四四〇

時計……………四四三

老嬢におくる書……………四四五

〈硝子の女〉

杏の三つある繪……………四四三

「杏の三つある繪」の講演……………四四五

道綱母……………四六六

消える硝子……………四六九

* 〈夕映えの男〉より

向日葵……………四六六

後 記

七十歳……………四八三

解題・校訂……………四八六

伊藤信吉
結城信一

小 說

かげろふの日記遺文

一、花やぐひと

彼女の眼を惹いてゐるわけは、見るとすぐにひやりとさせる顔の冷たい美しさであつた。それにも増して何時も容易には笑はない子で、ただ、眼をチラつかせるだけで、それでは言葉のかはりになり、笑ひの意味をも、つたへた。品とか位とかいふものを生れながらに持った女と見てよい、品と位のある顔はもう十七歳になつてゐても、こぼれる色氣を斥けてゐると言つてよかつた。雪のふる日にも簾をあげて庭を見守る日常には、その景色に相應しい顔たちと見るほかはなかつた。餘りに品の隆い顔といふものには、人の心を容れないあざけりが含まれてゐる、かうがうしいといふ感覺には抒情が乏しいものだ。

かげろふ日記の筆者である紫苑の上は、天曆七年には十八歳になつてゐたが、つやつやしい皮膚の明りはもつてゐたけれど、高慢とも、あざけりとも見えるかはつきは深まる一方で、それは消えがたいものになつてゐた。これが平安のたをやめの一條件どころか、姫達の顔にさういふ弾^{はじ}くれたかぶりを見るのが、色ごのみの喜ぶいかつきであつた。もつとも美しいものにその反對の嚴格がほしかつたし、それを踏み越える慘酷をかれらは競うて眺めた。そんな意味で紫苑は人の眼を惹いてゐたし、男に飢^うゑを與へた。幼少の頃からあまかつら(甘味)を舐めるのにも、紫苑は誰知らぬ間にそれを舐め、湯あみするときに乳人^{あめと}に、からだを隙見はさせなかつた。自然なおこなひに不自然に成長してゆく自分を、遠いものに見てゐたかつた。女である初見の日はこの若い姫の眼に、けがらはしさを自らに省みたほどであつた。なにゆゑにさうならなければならぬかが、紫苑をくるしめた。矜持とか見識、

護り、身分といふものとは別個なこのいざなひを、女はなせに避けられぬかも或る日の永い不快さだつた。彼女は築山とか池とかの、諸々の草木を眺める間にも、その日の眼のけがれを感じた程だ、それも十八歳では次第に慣れては來た思ひだつたが、白綾の襲を着ぬ日は鬱陶しく、忌みきらふ日のうちでも、この日のつづくことは、木々の上にも、人のけがれを蔽ふやうなとがめを感じた。

或る夜、紫苑はこの事を乳人に打開けようか、それとも以前のままで過ごして置かうかと、その夜もまだひ續けた。それは兩の乳房の尖端にこりこりが出來、乳房のみねにしこりとなつて、だいぶ前から現はれて來たものであつた。女身といふものは何事も犯さずに溫和しくしてゐても、或るいまはしい事がらを仄かに考へてみた後には、からだに異常が顯現するものだといふ覺えるともない覺えが、紫苑に乳房の忌はしいしこりをあらはして來たことで、顔色をあをさめさせた。處女といふものはその考へにすら、迂濶に男の性を介入させてはならぬものだといふ教へが、怖れとなつた。だから、紫苑は手で肉體のいづくにもさはることを平常もしてゐないし、肉體が日にたわわになることが氣になつてゐた。ことさらに乳房にさはることは避けてゐたが、氣のせぬか、さはれば遠い痛みがあつた。この痛みはそのまま打棄つて置くわけにはいかぬ氣がし、乳人にけふ話をしようか明日聞いて貰ふ

かにあせつた。

或る夜、着替への折、紫苑は乳人の手を自分の乳房に持つてゆき、これを、と言つた。乳人は乳房のしこりをさぐり、そして痛むかどうかと問ねたが、紫苑はいまは疼んでは居ぬと答へた。翌日、あかるい日の中で紫苑はあからさまに、乳人に見てもらつた。そして乳人はさはらずにその儘にして置くことに注意していつた。

「これは若い内によくあることで、そのままではいらつしやれば何時の間にか、なくなつてゆく一時のあらはれにすぎませぬ。女が女として見られるまでには種々なからだの堰がございます。堰はたいせつに守つてやらねばなりません。」

乳人は何時も紫苑から反射されたまじめくさつた顔付で、お美事なお乳ぶさで何時でも御乳が事あれば、ほとぼしる時がやがてはございませうと言つたが、紫苑は心からいやな顔をし、紅梅襲を引き合せて匿してしまつた。からかはれた氣がして見せなければ宜かつたと思つた。それに、もひとつは乳人が着替へを頻繁にさせることが物慁く、そのままだしてたもれと言ひ續けても、烈しい若さの發散物はあま酸っぱく、かなしいよこれとなり襟の錦をくもらせた。彼女は焚きこむ香の間に、みづからの肌の匂ひをかぎ分けることでは、殆ど束の間のあひだに、かぎ當てることができた。

十八歳の深秋、はじめて紫苑は亂調の長歌を作つた。どう

にも、父、藤原倫寧にもはなされないし、乳人にも、召仕達にも打開けても判らないもやもやにおそはれた。腹が立つ怒りにも似て、それとは、くらべられぬ物悲しさであつた。自らのために生きるのか、父倫寧に安堵させる成人の美しさに迫りつくためか、一さい生きることの目標をはつきり見定めたい氣持のいら立たしさであつた。「何しかは生きてこれの身を、うるはしと褒めもほりけれ、白きはてなきわが身の山にもかけて、そだち到きぬ。人の身の山かけ草かけがよふは、をみなごのそは何のことがら、母にいらへ求むることにあらず、またよそ人に尋ねることにあらざれば、われは見ぬ、山かけてかがやく身の大きき、うるはしとのみ言ふは愚かよ、花つくるは草木のみにあらざれ、わが身の今宵の照りは湯づとみ（沐浴）にあふれて、月悲しそなたにも似て。」

紫苑は書き終へて羞かしさに簾の外をうかがひ、再讀して顔をあからめた。どうして斯様に、あらはな事をかき記したかと、にはかに、紙をまるめてしまつた。筆とれば思ふままの振舞ひが書き分けられ、たうてい口にすることも出来ない恥かしさも、すらすらと書き述べられることの奇異と面白さに、紫苑はべつの紙をまたひろげて思ひの髪をしらべた。書くといふことは心のままになることであり、書かれたことに對ふことの親しさは、自分といふ者のありかを確かりと掴まへられる氣になることであつた。いま一つ紫苑にあたへた異

感の動きは、仕への者の立居にも、朝夕の簀の子の景色、草木もいままでより媚びた明色に映り、とりわけ青い薄葉をのべた机のおもむきある紫苑の正座までが、後の世につながる思ひであつた。書くといふことの嬉しさの果に紫苑は生きる自分を見ることに、疑ひを持たなくなつた。彼女は自分にいひ聞かせてみた。何でもない事共でも書き溜めて、昨日がなにの爲にあつたか、明日はまた何のよすがで訪づれるかを、薄葉のうへに述べてみたかつた。薄葉はおちついて落筆を待ち、落筆は昨日よりも多くを尋ねるのである。物を書かうとする私よ、いままで何處かにかくれてゐてふいに私に溜つたものを、すくひ上げようとして来てくれたあたらしい私、私はそなたを托み、そなたは私をかい抱いてくれるやうにと、紫苑は自分を掴んだ。

父、倫寧は或る日、机に對つてゐる紫苑にその書き物をお見せといつた。多分、見せはしないであらうが、紫苑の叔母の佐野がいまからあのやうに書き物をして、殿合せも顧みないでは困ると進言したためであつた。やはり紫苑は父にかぶりを振つて紙をひらいて見せることをしなかつた。再度、倫寧はただの一枚だけでよろしい、そなたがどのあたりに筆をとどめてゐるかを知りたい、そなたも自分の文の才を確かめ

て置かねば、折角の書き物もむだになるではないかと言ひ、紫苑はその言葉にはじめて意味を知つた柔らいた顔付で、一枚の薄葉をさし出した。

「私は護摩の御符を飲んでみたが、母上の仰せのやうにお腹の痛みはとまらなかつた。あのやうな細かい砂子のどこにお藥になるものが潜んでゐるのであらう。私は物忌みのない晴れた日の川原に出て、僧が砂子をすくひ甕かめにをさめる姿をみたことがあつた。それは貴い加持祈禱をあたへた砂子であり、服用すれば疫病も治るといふ僧の申し開きであつたが、私には何の効きめもなく、そのむなししい砂子は次ぎの服用にはもちひずに取り棄てて了つたが、貴い砂子の祟りもなければ、捨てられた砂子には青い煙も立たなかつた。却つて今になれば氷柱つららを舐め、雪霰を頬張つてゐたら、私の腹中も爽やかになつたかも知りませぬ。」斯様に記された言葉に倫寧は、書き物をしてから臉上にある娘の氣ぶりを、それは書き物によつて心のもゆる有様であることを知つた。そのしめくくりには、更に斯うしるされてあつた。「勿論、母上の仰せは仰せであるが、私の考へも考へであるとしなければならぬ。」と、添へ書きがしてあつた。

倫寧は娘の顔をけふは見直すやうに見て、物を書くといふことの恐ろしさ、書く才を眼の前に見た眩しさを抑へていつた。そなたはどの女おんなをまだわしは見たことがない、わしがい

ま見たものは既にわしの娘からはなれた一人の才媛として、花やいで見える。併しそれは花のやうにつぶれて了ふかも知れないし、才能はたちまち跡方もなく消散するかも知れぬが、これだけに盛られてゐるものがどのやうにして滅びるかが見ものであるといつた。さらに、そなたが子供の折からなかなか笑はぬ子であつたし、つめたいだけの麗質だつたが、それはそのまま鍛へられただけで、いままさうなのである。わしは娘としてのそなたが其様に人の氣をよせつけない女に、夥しい懸念を持つと言つた。

「お父上、わたくしは心で思つたことを顔に現はす體ていの女でございませぬ。そのために長歌を物し日記風の物語をつくるのでございませう。ものを書きはじめてから、草にも花にも、顔と顔と相觸れる思ひがしてなりませぬ。つづめて申せば愉しい心のはずみを感じてゐるのです。お父上はいま少し私を當世風な眼と粧ひで、ありふれた娘としての御望みがおありでせうか。」

「わしの望みは迷うてゐる。そなたがこのままに紙と筆とを持つてゐたら、二人なき女性になり得よう、併しそれは女の伴せになるかどうかは疑はしい。」

「ではよき妻にとの御望みでいらつしやいますか。」

「父といふものの願ひもそこに落ちつくが、いまはそなたをとどめるにはわしの力柄が不足してゐるくらゐだ。」

紫苑は大勢の仕へにも、倫寧の遠慮がちなもの、母や乳人も紫苑にさはらぬやう氣をつかつてゐるのが、つらかつた。妙な氣おくれが表にはなかつたけれど、みんなの心に紫苑になるべく障らぬやうにしてゐるのが、餘計眼立つて來たのである。

紫苑、十九歳、髪はうしろにけぶり、蒼顔はただその瞳と同様に澄んで、ふつうの姫達とは年の二つくらゐ上に見られた。當時の高貴の姫達にある共通のけんのある面持は、紫苑にあつては處女の氣高きに加へて、物書くひとの怖れを拒んだ大膽な眼づかひと氣ぶりがあつた。戯談とか笑ひとかを生れながらに斥けた人の、うつくしさである。さういふ女に梅の枝に歌の文を寄せ、七日あまり通ひつづける男があつても、紫苑は少しのうろたへも見せなかつた。彼女自身がそれを作りあげる譯ではないが、机をはなれて庭を眺めてゐる傍に殆ど寄りつけぬ默示があつた。つまり何を言つても邪魔になる氣はひなのだ。

その年の春の終りに、倫寧は或る日、紫苑に藤原兼家からの申入れをつたへた。兼家は右兵衛佐で右大臣師輔の三男、當時は本妻、第二夫人の併立される時代だから、時姫といふ本妻があつて一子道隆がすでに生れてゐた。

紫苑の矜持はそのやうな言葉を、父の口から聞くだけでも、更に高く反撥したのである。紫苑はたじろぐ父の怯えた

顔色を見つめて、臆しないで言つた。

「お父上は兼家様に何とお答へあそばしました。私はそれから先にうかがひたいのでございます。」

「わしは内諾をあたへて置いた。そなたとても、そのままひとりでは居られまい。」

「兼家様には時姫といふ方がいらつしやいますことをご存じでせうに、お父上としては私の意を先づおたづね下されても宜かつた筈でした。」

「それでそなたは？」

「私はそのやうに本妻のある方には心が動きませぬ。」

父、倫寧の沈着も、澄み切つた紫苑の顔から眼を逸らせるやうに、この言葉がはたらいた。倫寧もまた正、妾の境にこの時代のしきたりの痴情をこぼみ得ぬ人だつた。父をあがめてゐた紫苑がこれらの情景の中に、父を見、父を感じ、その教養を併せてかんがへることが、くるほしいものであつた。父もやはり男といふもの、男の持つ一さいを備へてゐる人としての考へ方は、紫苑には、何時もそれを取り除きたいやなものであつた。

紫苑の考へは無理にも、男でない父、いまの世上の男達の持つ放埒をもたぬ父としての見方を持ちたかつた。だから、けふ兼家の求婚の話が持ち出された時の、父、倫寧のいひやうのない眼に見たことのない極りの悪さ、娘といふものに平

然と暗い波をかぶせることをすすめる倫寧を、父でない別状の人のやうに思へた。紫苑はふだん父の匂ひをかぐことがきらひであつた。母には乳の匂ひがあつて愉しかつたが、父には乳に似た匂ひはなく、厳格な隆い叡智のけはひにごつごつした崖のやうな匂ひが、紫苑に父といふものの匂ひであつたことが、ひそかに嫌はれてゐた。それにも増して紫苑はさらに細かい眼で、父の胸とか手とかを見て、世上の男といふものを引くるめて見なければならぬことを、何時も恥ぢた。父の沐浴の折に行きあはせた時は、紫苑の驚きはちひさい叫びごゑと、むねには鼓動を感じたくらゐだつた。娘といふものは露はな父のからだを見てはならないものだ。それを見たときには眼は洗はなければならず、心に永くとどめて居てはならぬものであつた。紫苑はまた何かの弾みに若い仕丁が井のほとりで、からだを拭いてゐるすがたを見たとき、甚だしい羞かしさをおぼえた。しかも、それらの世界がいちど眼にはいると脱けることを知らないで、永くおぼえてゐることが更に忌はしかつた。

だから紫苑は自分のからだのどの部分にも、寢所にはいるとそれに觸れぬやう、手はしとねのうへに重ねて寝てゐた。母からの教へもあつたが、十九歳の紫苑のまゐることは、夜は手をからだから外して寝ることであつた。そのやうにして寝ることの憚りのない慣みは、夜半は眼ざめてからだの両脇

に置かれた手の安泰をおぼえると、なによりも正しい恥ぢない嬉しさを感じた。今宵も私はよい寝姿をそなへてゐたといふ歡びは、紫苑の純潔をきづいた。

或る秋づいた夜のあさい時刻、突然、門の前に騎馬のけはひがして、入り亂れて戸を叩く供のある者がゐた。紫苑の寢所にもその物音が聴え、邸内の仕への女達がその騒ぎにみな表がかりに出て、様子をうかがつた。召仕達が紫苑につたへて、藤原兼家が正式に求婚する使者であることが判つた。何方にしてもお文をいただく由がないとつづねても、使ひの武官はもう邸の内に馬を乗り入れ、供の者はこんどはひとつそりと植込みに集まつた。

供の者の差し出す文章は、にはかに思ひついて書いた物らしく、粗い紙に、兼家の能筆にもかかはらない、禿びた筆蹟で、認められてあつた。紫苑はただそれを例のつべたい思ひで、讀んだ、みんなの騒ぐ中でこのやうなおちつきを見せる紫苑が、どう答へるかと思つた。勿論、紫苑は返しを書く氣がしないといひ、倫寧の妻はそれだけはお答へあれと何度もつたへた。文章の内容は、「音にのみ聞けば悲しな郭公ことかたらはんと思ふ心あり」とあるだけで、紫苑は返しを書くかぬといひ、その答へを待つ門内外のざわめき